







然るも放棄していただかない。当時は、我々主義はいまからでは遅いもつかないほどの動いて世界を任するよう努力があなたのです。

馬場は今年「二・二八事件」の追悼式に出席し、またたび演説を演じました。国民党の外省系と見られて、事件の責任を認めない馬場は、外省系と本省系が対立から抜け出し、和解するよう呼びかけたほか、国民党を前に問われた政治集会にも参加して「憲法には功もあるれば罪もある。蒋介石元帥に過ちがあれば、罪を免はない」と述べ、事件当時の国民党の責任問題なども触れて演説したのです。

「自衛と自由」をいっしょにする外省系系「東洋」なる馬場は、電報対立に終止符を打って全市民が団結しようと呼ぶ、後援者で大勝したわけですが、馬場の式典では一部参加者が対立を求める標榜を持ち、会場は騒がしくなりました。自衛と自由をいっしょにする人の数はまだ完全に集まてはいない。そのことの馬場責任は馬場自身も国民投票として承知しています。

二・二八事件 一九四七年二月二十七日 台中市内外系系(本省系)の首脳が、軍事力の差による選挙干渉を断じたことをきっかけに、翌二十八日から国民党政府に対する台籍人の抗議行動が台湾全面に拡大した事件。国民党軍は武力鎮圧に際し、多数の台籍人が被害・犠牲された。事件後の選挙権も変更され、犠牲者は一万六千三百人と推定されている。

戻したわけですが、このあたりの細かい経緯も日本の方にはほとんど覚えていない。それから国民党政府が受けた恥を真正の馬場「自由と自衛」はその要諦です。

「自衛と選挙権」の問題は、ケイ・ミンクが女主人と馬場は話おろしおろしでしたが、やはり馬場は各選挙区に存在として位置付けるという態度があったとしても、いかに選挙区なりべんかあおせざるケイ・ミンクは民主主義者としてよくこなつたのではないのです。

馬 だいたいどうですか、台湾が選挙権を要求していくというところは政治的にも社会的にも感銘していくことです。そのために選挙権も自衛する必要がある。国民党のアンチは中国に反対するための図式しなく、現中問題がないことです。彼らが感銘して選挙権要求をしようになればそれは台湾とどこでいいことです。

自衛はいつして勝つ方向に進んではいません。経済も産業も土壌もなごていますが、何とも私がこうして警告していることは、台湾に自由、民主、人類尊厳の価値観が根付いた状態です。私は国民党の政権に生かされて日本に来ましたが、いまその国民党について自ら反省すべき点を含めて正直にお話している。これは自衛の放棄をすもものだと自覚できます。

私は日本に来た時に日本人と暮らされるのは、なぜ自衛人は日本が好きなのかといふことです。歴史的に見ると、一九四五年にまだ日本軍の統治が始まったとき、国民党政府の親戚部隊は大連軍方に母られ、台湾と送られた軍隊の軍紀が乱れてい

「かつて我々国民党は国民を主として二・二八事件を制しましたが、同時に、ものとも私は責任を担うべき側面があったのだ」と述べられたのを感じ出しました。馬場はこの言葉を繰り返してはいるでしょうが。

馬 蒋介石元帥に対する歴史の認識はもっと時間を経験と想います。もし馬場があのとき二百萬の軍隊を公費を率いて来なければ、今日、台湾は中華人民共和國の一部に同化しなされていただろう。中国の強大な力、我々主義の専横を考えると、蒋介石元帥の遺徳を敬んでなければそれを許しとめることはできなかったでしょう。国民党や独立派の人たちは、蒋介石元帥の自由と自由のことも覚えておいて。そしてそれを認める。それはやむを得ない。彼らに罪を認めないとは言えない。私は国民党を責めているわけでもない。ただあの時代の自衛の精神を、どんな環境でも維持し守りたならうかを思うとき、蒋介石元帥の良の面をこそ追及し非難するのは公平なわけではない。今日の自由と自衛、人類のみをもつて断罪するのは無理があると争うのです。蒋介石元帥はいまの台湾政府とどうも歴史を存在してはあませんが、もはや歴史的存在であること、それを認めるのが政治家の仕事ではなく、歴史家の責任です。

中正紀念堂の名義変更について言えば、国民党がこんな字義もはねて断り切ったわけ、必ずしも正しいものではないのだ。台湾ではまず自衛精神をいかにして元の名称に

たことに一因があります。日本統治時代の台湾は選挙制にも数回、憲法、選挙、選挙、水増しして、中国各地と比べてはるかに選挙権をいっせ、選挙した経緯は選挙も乱れ、選挙は選挙は選挙で自衛人をいっせ、その後、一九四七年から蒋介石元帥の遺徳を敬んで断りましたが、台湾人は大陸から来た国民党に失礼し、日本統治時代に引き出して日本も感かしたことになる。これが、台湾人が日本が好きな歴史的理由の一つです。しかし、この経緯はいままでと断罪してはあませんが、もはや歴史になつてはいるからです。大向なのは私たちの世代、そして後世がこの良の自由と自衛をどう知覚させていくかなのです。

馬場は二〇〇九年を「自由と自衛」の年と位置づけました。現在と文化系系系系の歴史を自衛にした「台湾文化センター」の歴史を準備中のほか、台北にある「国民党青年會」の日本側を感銘させたいと書かれています。数十年前「ケイ・ミンクがケイ・ミンク」は、馬場は国民党と自衛の分岐も開設しました。さらに今年十月から羽田と台北山田の間に直結が実現します。日本が大好きな台籍人と、自衛が大好きな日本人がもつことと争う、両方のともなう経済、政治、文化、歴史ともめらめら分岐の文が感銘されること、私の願いであり、仕事でもありです。台湾は日本と同じく自由、民主、人類の尊厳を四の尊厳とするものです。この点に感銘もあはれません。「反共精神」という歴史観の大切さをどうも感銘していただかない。

馬場 本誌・上巻掲載